

プロクロスに見るプラトン対話篇単一主題探求型解釈法の 歴史的な位置づけ—トラスユロス (Thrasyllos) の解釈法の 批判的継承について

瀧 章 次

1. 本論の課題

小論は、プラトニズムの歴史において、5世紀におけるプロクロス(412-485)のプラトン対話篇諸註釈、並びに『プラトン神学』等他の著作に伺われる、プロクロスのプラトン著作解釈法が、どのような歴史的対論を通して生成してきたかを探るものである¹。特に本論は、プロクロスに特徴的な方法、各個対話篇に一つの主題を発見する解釈法が、1世紀にトラスユロスがプラトン作品編纂の際に前提としていた方法論に、形式的のみならず実質的にも負っていることを明らかにする。そしてその実質的な継承の決定的な証拠として、プラトン理解にプロクロスが導入するロゴス論が、トラスユロスのロゴス論と通底するものであることを明らかにする。

以上の結論は、H. Tarrantのトラスユロスに関する文献学的研究²によって論じられた結論に包括される。その点では、すでに Tarrant において含みとしては提出されていることである。しかしながら、その含意の確証のためには、プロクロス著作における具体的検証を図る必要が残されている。本論は、Tarrant の見解の紹介や追認に留まるのではなく、文献上の証言を以て、プラトニズムにおけるプロクロス記述の歴史的意義を明確にすることを課題とする。

2. 方法論上の問題点

プロクロスもトラスユロス³も、それぞれが支持したプラトン解釈法を主題としてわれわれが議論しようとするとき、先ずかれらの責任に帰すること自体が、つまり、「プロクロスの」、「トラスユロスの」と言及すること自体が、まさに

本論は、第7回フィロロギカ研究集会(2008年10月25日 日本学士院)研究発表「プロクロスは、ソクラテスの対話をどのように読んだか—イアンブリコス、汎ロゴス主義、ロゴスの probole を中心として」、並びに、Research Conference “Socrates, Alcibiades, and the Divine Lover/Educator”(Univ. of Newcastle, AU. 4th -6th Dec.'08)にて回覧される論文“Proclus' Reading of Plato's *Sokratikoi logoi* — a note on his commentaries on the meta-dialectical remarks in the *Alcibiades* (112d-114e) and Plato's other dialogues.”に関わるが、いずれにおいても主論的には論じなかった問題を扱っている。一連の論考は、本紀要前号論文「プラトン著作中世ビザンツ写本 Parisinus graecus 1807 fol. 1^r col. 1 fol. 14^r col. 1(『クレイトポン』、『国家』第1巻)に付された疑問符の形態、出所、特質について」に端を発した句読法成立以前のソクラテス理解に関わるものである。

¹ プロクロスに関する邦語文献としては、プロクロス注釈と近代の注釈との比較に関しては、田中美知太郎「古典研究における解釈の問題—プロクロスの注釈から」『西洋古典学研究』1(1953)1-10、中世哲学、ヘーゲル哲学との関係に関しては、岡崎文明「西洋中世における新プラトン主義の思想源泉の研究—『プラトン』のバルメニデスをめぐって」(課題番号06610006)(平成6-8年度科学研究費補助金[基盤研究(C)]研究成果報告書、1998、プロクロス哲学の体系に関しては、同「善と存在者—西洋哲学史研究序説」晃洋書房、1993、概説的記述は、水地宗明、田中美知太郎共著、『プロティノス、ボルピュリオス、プロクロス』、中央公論社、1976、山口義久「プロティノスと新プラトン主義」、内山勝利責任編集『帝国と賢者』(哲学の歴史、第2巻)、中央公論社、2007年がある。

² Tarrant, H. *Thrasyllos Platonism*. [=ThP] Cornell, 1993. esp. ch. 5, 108-147.

³ Dillon, J. *The Middle Platonists*. [=MP] Cornell, 1996², 184-185.

歴史的、文献学的批判の上に仮設されることである、このことを明らかにしておかなければならない。プロクロスについては、多くの著書、プラトン対話篇注釈書が残されているから、その点では、容易に「プロクロスの」と言及することができると思われるが、実際は、プロクロスの記述には、誰かれのという出所が明らかにされないまま、先行する諸学説が、潜りこんでおり⁴、プロクロスの originality はしばしば懐疑の対象となっている⁵。またトラスユロスについては、プラトン著作に関するいかなる解釈法を採用していたのか、その自説を著した著作は現存していない。すべては、ディオゲネス・ラエルティオス(以下 DL)始め、他の作家の引用によるところである。従って、トラスユロスの説を確定することは慎重な手続きを要する。そこで、本論では、議論の進め方として、先行研究を援用しつつ、まず、プロクロス側に焦点をあて、プロクロス自身に意識されているところの過去の的方法論との対話を明らかにする。そして、次に、トラスユロスの立場を明らかにし、プロクロスの立場と比較し論ずることとする。

予め手続き上の問題を記すと、プロクロスは、直接名前を挙げてトラスユロスを論ずることはしていない。プロクロス著作は、先行する古代プラトン解釈法の宝庫ではあるけれども、実際には、トラスユロスの名前は出てこない。プロクロスに時代の上で近接する、アレクサンドリアの新プラトン派エリアスによると推定される *Prolegomena philosophiae Platonicae*⁶、この著作自体が解釈法上の大きな歴史の見取り図を与えてくれるものであるが、これにも、解釈に関する議論があって、俎上に上っているのはトラスユロス以外には考えられないと認定できるが、それにも関わらず、その名前は見えていない。従って、プロクロス自身は、歴史上の誰と対論しているのかは、豊富な先行研究への言及にもかかわらず、明言していない⁷。従って、われわれの認定によって、トラスユロスとの対論と見なすのである。従って、プロクロスが誰の論をどこまで見定めて対論しているかは、わからないままであるけれども、現在のわれわれの視点から、歴史的な対論の相手として、プロクロスがトラスユロスを想定していると解釈して、この人のプラトン解釈法を明らかにする。この議論の進め方は、プロクロス自身の歴史的対論を、現在の歴史的な視点から、評価するという方法である。トラスユロスについても、主たる典拠のDLの記述でも、既に、他の著作の引用から、著作しているところから、文献批判的手続きによって再構成されるものである。その詳細な試みは Tarrant のうちにあるが⁸、本論では、プロクロスの対論の歴史性を明らかにする点において、トラスユロスの名前の下に帰趨する立場を論ずる。

3 . プロクロスにおけるプラトン対話篇単一主題探求型解釈法の歴史性

プロクロスは、プラトンの個別対話篇には、それぞれ一つの狙い(*skopos*、時に文脈上同義的に *prothesis*)があるということを主張する。例えば、『アルキピアデス』の狙いは「われわれの本性(*ousia*)に関する考察」、
「自己自身を知ること」であり(*In Alc* 6, 7)、⁹『パルメニデス』の狙いは「イデアについて」であると主張する(*In Parm* 630⁹)。これが、現存資料から考えて、DL が引く(3.58-59)、トラスユロスが1世紀にプラトン著作を編纂し

⁴ Dillon, J. *Iamblichii Chalcidiensis In Platonis Dialogos Commentariorum Fragmenta*. [= IF] Leiden, 1973. 54-60; id. *Introduction* in G.R. Morrow and J. Dillon, *Proclus' Commentary on Plato's Parmenides*, Princeton, 1987: xi-xlvi.

⁵ Wallis, R.T. *Neoplatonism*. London, 1972. 144-145.

⁶ Hermann, C.F. *Plato Dialogi VI*, (Teubner) [1853], 196-222.

⁷ なお、こうした議論の相手の特定を避けるプロクロスの引証の仕方についても Tarrant の検証がある(*ThP*, 148-149).

⁸ *ThP*, chh. 1-4.

⁹ Steel, C. *Procli In Platonis Parmenidem Commentaria*, Oxford, t. 1 (2007), t. 2 (2008).

た際の副題形式に関わることはあきらかである。副題がトラスユロスその人が付けたか否かは議論の余地があるにせよ、現存資料から、その関係性は明瞭である。実際、『アルキピアデス』について、プロクロスは注釈の序で、先の狙いを、「トラスユロスの副題」と同じ「人間の本性」(*anthropou phusin*)と言い換えている。また、『パルメニデス』についてもプロクロスの考える狙いは、全く「トラスユロスの副題」と同じである。プロクロスの現存注釈、『クラテュロス』、『国家』、『ティマイオス』各篇の注釈にも冒頭に、狙い(*skopos, prothesis*)を巡る議論がある(*In Cra* 1¹⁰; *In R*¹¹ 1.5.1ff.; *In Ti* 1.1-4¹²)。そして、そこには、「トラスユロスの副題」にある、「名前の正しさ(について)」、「正義(について)」、「自然(について)」への言及がある。

ちなみに、DLには、3.49にプラトン対話篇の性格付けに関する分類がある(文末の図を見よ)。この分類名については、3.58-59におけるトラスユロスのプラトン著作編纂法を提示する際に、各作品ごとに、前述の副題に続けて、最下肢の分類名、*physikos*「自然学的」、*logikos*「論理的」¹³、*ethikos*「倫理的」、*politikos*「政治的」、*maieutikos*「産婆術的」、*peirastikos*「試練的」¹⁴、*endeiktikos*「演示的」、*anatreptikos*「倒論的」が付されているが、この性格分類についても、単一主題を論ずる際にしばしば言及されている(*In Cra* 2; *In Parm* 630)。

確かに、プロクロスには、トラスユロスへの言及がどこにもない。しかし、上述の副題、対話篇の性格分類における対応は、単なる形式的な一致ではない。プロクロスの視点からは、先行する研究(*In R* 1.7.6-8; *In Parm* 630.26-631.4)、それも「副題」(*epigraphe*「昔からある副題」*In R* 1.8.11)を巡る議論の結果である。実際、プロクロスは、イアンプリコスの名を挙げている(*In Alc* 13)。

この単一主題探求型解釈法の歴史性は、プロクロス以外にも証言がある。イアンプリコス(245-325)は、Dillonの前掲断片集によれば(n.4)『パイドン』篇(fr 1, 3-4)、『パイドロス』篇(fr 1)、『ピレボス』篇(fr 1)、『ティマイオス』(fr 1)に関してこの解釈法に関わっていたと推定できる。また、オリンピオドーロス『アルキピアデス』篇注釈には、プロクロス、ダマスキオスによるこの解釈法が論じられている(*In Alc* 3-6¹⁵)。また、オリンピオドーロスと異なる著者として、現在ではエリアスと推定される人物による著作、*Prolegomena philosophiae Platonicae*には、トラスユロスの名前を挙げずに不特定多数の論敵に帰しつつ、悲劇作家の作品分類にならう4部作構成(プラトンの作品は36作品と数える)に分類する編纂方法に対する批判があるほか(24-25)、この解釈法を前提とした先行の適用法に関する批判がある(21-23)。

プロクロスのこの解釈法は、また単なる形式的な題名に関する議論でもない。「Xについて」という形式に合わせてどんな名辞がふさわしいかを単に論じているわけではない(*In Cra* 1)。『国家』篇注釈冒頭の議論は、「正義について」とすべきか「国制について」とすべきか、『法律』篇との比較に基づいた実質的な『国家』篇の内容の議論の上に成り立っている(*In R* 1.5.1ff.)。『パルメニデス』篇に関して、注釈全体が現存している訳ではないけれども、現存する部分では、序の部分だけからでも察せられるが、先行する解釈、特に議論の練習や論駁の形式を主題とする解釈に対して、パルメニデスの対ソクラテス、対アリストテレスの各対話に関して、

¹⁰ Pasquali, G. *Procli Diadochi In Platonis Cratylum Commentaria*. Leipzig, Teubner, 1908.

¹¹ Kroll, G. *Procli Diadochi In Platonis Rem Publicam Commentaria*. 2 vols. Leipzig, Teubner, 1899.

¹² Diehl, E. *Procli Diadochi In Platonis Timaeum Commentaria*. 3 vols. Amsterdam, 1965 (orig. Leipzig, Teubner, 1903)

¹³ 所謂われわれの「論理」ではなく「問答法」(*dialektike*)に関わるものと考えられる(*In Cra* 2)。Tarrant, *Plato's First Interpreters*. Cornell, 2000: 183-184に考察がある。

¹⁴ *Prt.* 347e-348aにあるように、対話するもの自身の信念が試される対話。

¹⁵ Westerink, L.G. *Olympiodorus, Commentary on the First Alcibiades of Plato*. Amsterdam, 1982.

形式、内容ともに従来の解釈を刷新する意図のもとに、単一主題「イデアについて」の妥当性を論議、追求していることが分かる。具体的な単一主題に至る過程に関しても、『アルキピアデス』篇注釈序において、イアンプリコスの先行する方法に負うものとして、対話篇の内部に関する構造論とともに、10 の *sylogismos* (議論) を対話篇から分析し、その議論が、「自己自身を知る」、すなわち「人間の本性」を知るという一貫した主題を指示するものであることを提示している (*In Alc* 11-18)。確かに、*sylogismos* について、論理的な形式が整っておらず推論の妥当性を量れない、構造論や主題導出に関しても自身の哲学体系を論理的に先取している、以上の非難は免れがたい。それにもかかわらず、序に続く具体的な注釈においては、こうした主題への指示が各所で顧みられているのである (e.g. *In Alc* 279-280)。

この単一主題探求型解釈が実質的な議論を担っていたことは、すでに明らかなように、少なくともイアンプリコスに遡るものである。この *sylogismos* の分析から単一主題への帰納という方法を、イアンプリコスがどこまで一貫して適用していたかは分らないが、先の断片は、少なくとも実質的な議論に基づくものであることを示している。

以上より、トラスユロスの名前を挙げて、特定の対話篇の個別具体的なその人の解釈を対象として、批判検討しながら、プロクロスが自身の単一主題探求型解釈を提示している訳ではないけれども、歴史的にみて、トラスユロスの名前と共にわれわれが知ることの出来る解釈法を、プロクロスが、重要視し、その枠組みの中で、先行の適用法を吟味しながら自己の解釈を定位させていると結論することが出来る。

4 . トラスユロスのプラトン解釈法

トラスユロス自身のプラトン解釈は、個別対話篇の特定個所の具体的な解釈としては何一つ伝わっていない。DL3.1 における唐突なトラスユロスへの言及は、DL の叙述にあたっての資料利用法から言って、トラスユロスのハンドブックの存在を疑わせるが、トラスユロスに結びつくものは、先に述べた、悲劇作家の作品分類に倣う 4 部作構成による分類法、各対話篇の副題、各対話篇の性格分類記述、以上三点しか DL からは分らない。この 3 点でさえ、歴史的にトラスユロスに帰することは絶対確実なことではない¹⁶。そのほかの現存資料においても、プロクロスの指示する伝統を遡る先に、トラスユロスの名のもとに、単一主題を導出する為の個別具体的な解釈のプロセスを取り上げ、プロクロスの解釈との間で比較対照するという、検証力の高い議論を求めることは、現存資料からは適わない。従って以下の検証力は間接的なものとならざるを得ない。

そのような制約は課せられているものの、Albinus の *Eisagoge*¹⁷ を見ると、間接的な証言とはいえ、トラスユロスに帰せられる先の三つの形式的と見える事柄が実質的な内容を伴うものであることを知らされる。トラスユロスの名前は、4 部作構成による分類法の責任者として、デルキュリデスの名前と一緒に挙げられている (*Eisagoge* 4)。これだけ見ると、Albinus が自説の展開途中で特に意義なく言及しているとも見られる。しかし、ここでの文脈は、どの順番でプラトン対話篇を読むべきかという問題設定のもとにある。プラトン対話篇を用い

¹⁶ Susemihl, F. "Über Thrasyllus: zu Laert. Diog. III 56-68" *Philologus* 54 (1985) 567-574; Hoerber, R.G. "Thrasyllus' Platonic Canon and the Double Titles" *Phronesis* 2 (1957) 10-20.

¹⁷ Albinus, *Introductio in Platonem*. (Hermann, C.F. *Plato Dialogi* VI, (Teubner) [1853], 147-151); Albinus と Alcinous の相違については、Whittaker, J. *Alcinous, Enseignement des doctrines de Platon*. (Budé edition), 1990. vii-xiii; Dillon, *MP*. 266-306; id. *Alcinous: The Handbook of Platonism*, Oxford, 1993.

たプラトンの教えを学ぶ教育教程の問題において、トラスユロスとデルキュリデスが提示した 4 部作構成による分類法による順番が、具体的に、『エウテュプロン』、『ソクラテスの弁明』、『クリトン』、『パイドン』という順番が、ソクラテスの生涯という観点から並べたものとしてそれ相応の理由はあるけれども、プラトンの教えという観点からすると、ふさわしくないと非難されているのである。

また、先の DL3.49 の対話篇の性格に関する議論が先行するが(*Eisagoge* 3)、ここでは、トラスユロスの名前が挙がっていないけれども、Albinus は、『*hyphegetikos* とは、教えや実践や真理の証明に適合するものであり、*zetetikos* とは、鍛錬の問答、論争、虚偽の論駁(*elenchos*)に適合するものである。そして、『*hyphegetikos* は、ことから(*pragma*)を狙いとし、『*zetetikos* は、登場人物を狙いとしている』と解説する。これは、Albinus その人の解説であろうか。この分類を作り解説した人の言葉であろうか。この言葉がこれ以前には、現存資料から出て来ないことを考えると、また、『真理の論証』、『虚偽の論駁』という定型的表現から考えると、Albinus が初めて解説しているとするのは奇妙であろう。しかも、この定型表現や *pragma* はまた、プロクロス著作では解説抜きの定型句であった。その上、『アルキピアデス』篇に始まる対話篇による教程を示す人は、現存資料では Albinus が最初である(*Eisagoge* 5; 無名の人は、DL3.62 にある)¹⁸。

Albinus は、トラスユロスをプロクロスへと繋げる中継点であるが、下記のテキストは、プラトン理解の前提となる考えにおいて、明確に、両者の共鳴を浮かび上がらせるものである。

トラスユロスのテキストは、Tarrant が詳細に考究したものであるが、ボルピュリウスの『プトレマイオスの「階和論」に関する注釈』の一節である。該当箇所は、ロゴスの多義性とその説明からなるもので、注釈本文とは相対的に独立したボルピュリウス自身の「ロゴス」理論の一節である¹⁹。このトラスユロスは、p. 91、96 に『七絃について』の作者として引かれており、ピュタゴラス思想との関わりかたから考えて、ティベリウス帝に仕えた、占星術者トラスユロスと考えてよい。またこのロゴス論の前には、魂の働きとしての感覚とロゴスについての議論が先行し、アリストテレスの「感覚とは、質料なしで、形相を受け取る能力である」(*de An.* 424a17-19)という考えとも、後のプロクロス『「ティマイオス」篇注釈』(1.249-250)における「感覚にはロゴスが欠けている」という考えとも異なり、「魂の働きとして、感覚は、物体と物体からの影響をとまって、質料に内在するかぎりでの形相を把握する一方、ロゴスは、物体からの影響もなしに、質料なしの形相において、実体を如実に現わす」と述べる。また、感覚の対象が何であるかを判断するものは、ロゴスであり、ロゴスは、形相であるばかりでなく、感覚対象の原因でもあることが示唆されている。階和を判断するのは感覚ではなくロゴスであるという議論において、以上のような、魂の働きとしてのロゴスと感覚の区別の議論に続いて改めて、ボルピュリウス自身のロゴス論が始まる²⁰。

¹⁸ Tarrant, H. op.cit. 2000: 118-123

¹⁹ I.Düring, *Porphyrios. Kommentar zur Harmonielehre des Ptolemaios*. Göteborg, Elanders, 1932 (repr. 1980): 12-13

²⁰ なお、ボルピュリウスのロゴス論は、アリストテレスの『カテゴリー論』に関する問答形式による解説 (Porphyrius *In Aristotelis categorias expositio* 4,1.64.28-30) にも、『「ロゴス」は多義的である(からである)』に続く部分にも見られる。そこでの大分類は、計算、発話、思考、宇宙の生成原理(*spermatikos*)であるが、『発話』(*prophorikos*)、『思考』(*endiathetos*)、『宇宙の生成原理』(原語は「種子的」*spermatikos*)は、ストア派の術語である。

テキスト1²¹

「ところで、ロゴスは多義的に語られるので、自然本性に関するロゴスも劣らずロゴスと言われる。このロゴスの内容は、(種子的)生成の働きであり、かつまた、自然本性そのものの生成の構成秩序に合致するものである。また数学者も、数を内容とするロゴスを語るが、そのロゴスは、勘定に関わるようなものでもあり、また、同じ類のものを類比関係において相互に比べてみたときの関係(比)を内容とするものでもある[pp.90-91「ロゴスは、また、同じ種類の2つの大きさが持っている、量に関するある関係と言われる」参照]。それゆえに、もっともすぐれた意味でロゴスであり、すべてのロゴスの先を行くのは、世界の事象をその本性に関して統一する関係づけと計算することとを同時に担うロゴスであるが、これはまた、魂による推理が模倣するようなものである。またこのロゴスは質料に形相を与えるものでもある。なぜならば、質料が形相を与えられるのはまさに、数え尽くされ、ひとつにまとめられるようにであるが、その過程には、質料の内に生ずる情態や条件を相互に比較して秩序づけることを伴っていて、そしてその秩序づけは、そうした状態や条件の相互の関係や、整合性の観点に従って行われているのである。また、そうした状態や条件が、類比的にそれぞれの生み出す作用や万有を取り巻く環境に従って按配されることによって全体は整えられているのである。全体の整えにはロゴスと推理が伴っているが、そのロゴスと推理は、万有を統括する神が、まさに聖なる知識と理性活動を持っているように、そのように用いている。またそうした全体の整えというのは、自然本性が宇宙の中にある個々の物を提供している条件のもとにおいて成り立っているのである。」

これに直接続いて、トラスユロスが登場する。

テキスト2

「これは、また、トラスユロスの主張に従えば、形相のロゴスであり、そのロゴスとは、種子の中に詰まっている(*sunespeiramenos*)のもので、隠されているもののように、おのおのの本性が顕現する(*anelissei*)のに従って、展開され拡げられていくものであり、また、頭で描いたものに似ているものをつくる点で技術をもちいて構想する際に内在するものであり、また、技術をもちいて作られた完成品そのもののうちにおいても内在するように、推理的思考を用いる思慮や知恵が遂行する推理にも内在するものであるが、そのようなロゴスの内在が成立する条件は、知性(*nous*)が、そのものの何であるかを映し出し、それぞれの本質を定義しかつ確かなものにする限りである。また、このようなロゴスの内在が存立する場では、定義を表わすロゴスも論証を表わすロゴスともに対象を明証する働きをもっている。(以下定義と論証に関する説明が続く²²)」

テキスト1、2が厳密に何を語っているかは議論を重ねる必要があるが、ここでは、プロクロスと通底することを確認するための議論の範囲にとどめる。テキスト1は、各個靈魂の働きとしての推理計算する理性的働きが、対象認識においても、形相の付与という形で働いていることと、神の世界生成原理において、神(の靈魂)において類比される働きがあることを語る。そして、テキスト2の冒頭は、この個別靈魂の働きと、神の宇宙生成

²¹ Tarrant, *ThP* 1993: ch. 5, 108-147

²² Tarrant は後続のボルピュリウスの議論からも、トラスユロスの説を掘り起こすが、本論ではその手続きに関し留保する。

原理の両方が、ロゴス論として、トラスユロスに帰せられることをポルピュリウスは示唆した上で、さらにトラスユロスの考えを具体的に付け加えている。ここでは、靈魂の能力としての知性(nous)の働き、設計を具体的な工作物として顕現させる働き、種子が木に成長する働き、三つの間の類比関係のもとに、生成の媒介項として「形相」と言い換え得るロゴスが語られ、さらに、このロゴスは、事物の何であるかを表す定義、論証という言語的媒体としてのロゴスと関係づけられている。このようなポルピュリウスの記述から読み取れるロゴス論について、プロクロスのロゴス論との比較を以下に試みる。

5 . トラスユロス、プロクロスのロゴス論の比較

プロクロス自身のロゴス論は、多くの著書に分散して見られるが、まとまったものとしては『ティマイオス』篇注釈 2.246.10 以下にある²³。このロゴス論は『テアイテス』篇のロゴスの三つの意味に言及した後に続く。

思念(*doksa*)、推理(間接的思考 *dianoia*)、知性(實在の直知 *nous*)という魂の働きに応じて、思念的ロゴス、推理的ロゴス、知性的ロゴスに分ける。ロゴスは、思念、推理、知性の各段階で働いているが、思念は、ロゴスの欠如した理解と結びついていて、知性の働きとは結びつかず、推理の最高段階としての知性は、推理が多(個別の対象)に向かっているときはその働きと結びつかない(1.246.20-31)。そこで、「われわれの中にあるロゴスは、知性の知性的働き(*noesis*)の下で進行している」(1.247.20)、また、知性の働きの対象は、ロゴスを伴って、知性によって、把握される」(1.247.21-22)と、そして、「何となれば、われわれのロゴスは、知性の働きの対象を、知性の働きとともに捉える一方、常に知性による働き(*noesis*)は存在し、かつ知性の働きの対象を見、ロゴスもまた知性的になるときは、その対象にロゴスを結びつけるからである(1.247.22-25)」と理由が述べられる。また少し後に、「知性は、自分自身を知性の働きの対象としているので、それゆえに、また全体を捉えていると言われるが、ロゴスは、知性を通じて、存在者の概念を、自分自身と構成要素を共にしている仕方で、所有しているの、そのようにして、その概念を通じて、存在を把握していると言われる」(1.247.29-1.248.1)。知性が形相を捉える働きをしていることを理解すれば、個別靈魂の働きとしてみた場合、プロクロスのロゴスは形相把握の媒介項であることは明らかであり、拠って、議論の枠組みは、トラスユロスの枠組みと通底するものであることは否定できない。

また、感覚論における「感覚はそれ自身ではロゴスを持っていない(1.248.29)」とする結論に至る過程では次のような個別靈魂の働きに関する議論が展開される。

「理解の作用の系列で、一番上にあるのが知性の働き、*noesis* で、ロゴスの上位にあり、移行しない(1.248.30-31)。ロゴスは第二位である。ロゴスはわれわれの魂の知性的働き *noesis* であるが、存在者を移行的に(*metabatikos*)把握する魂のである。第三位は、思念(*doksa*)である。ロゴスに従って感覚対象を理解するものである(1.248.31-249.3)。第四位は、感覚(*aisthesis*)である。ロゴスをともなわず、感覚対象を理解するものである(1.249.3-4)。何となれば、ソクラテスが(*Rp.* VII 533d)理解の対象を理解の働きによって規定しているように、間接的思惟(*dianoia*)は、思念(*doksa*)と知性(*noesis*)の中間にあり、中間の形相を理解する働きであるが、この形相に関しては、それが要する魂による働きかけ(*epibole*)は、知性の働きに較べて、ぼんやりしたも

²³ Festugière, A.J. *Proclus, Commentaire sur le Timée*. t.2. Vrin, 1967: 82ff.

ので、思念に較べて明るいものである。思念は、存在者を理解するロゴスをもっているので、ロゴスに従ってあると言うべきであるが、原因を理解していないと考えられるので、それ以外の点では、ロゴスに欠けていると言うべきである。…しかし、感覚は、あらゆる意味で、ロゴスに欠けていると主張すべきである。(1.249.12-13)…生成するものはみな感覚を伴う思念によって把握できるが、感覚は状態を伝え、思念は、状態に関する情報(諸ロゴス)を自分自身の中から投射し、そして事物の实在を理解するのであり、また、ロゴスが知性の働きと結びついて、知性の対象を捉えるように、そのようにまた思念は、感覚と結びついて、生成するものを理解するのである。というも、魂は、中間の本性に与っていて、知性とロゴスの欠如との中間を満たすからである。何となれば、魂は、自分自身の最も最高の部分であるが、知性とともにある一方、もっとも離れた部分によって、感覚に対して傾いているのである(1.251.4-12)。」

以上、この個所におけるロゴス論は、魂の段階的な働きを区分し、その働きに応じてロゴスを見ていく点で、トラスユロスの論より、個別靈魂の働きを詳説しているが、实在の把握を媒介する働きとしてロゴスを捉えている点では明らかに通底している。

それでは、宇宙靈魂、神の靈魂におけるロゴスの働きについてはどうであろうか。『ティマイオス』篇 39e-40a における「そしてこれらのアイデアは4つある。ひとつは天の神々の類であり、別のものは、羽があり空を行くものであり、第三は、水に棲む類であり、そして、乾燥した陸地を歩行する類が第四である」という箇所に関して次のような注釈が続く(*In Ti* 3.104.30ff.)。

「ちょうど、世界創出に関わる知性の働きそのものに関して、知性的な多を導くのは、まさに一性であるように、また、数の範型には、一のアイデアが先在しているように、そのように実に、神に関わることの解釈者であるロゴスもまた、自らがその媒介する伝達者であるその諸事象の本性を形に表わすものであるが、先ず第一に、一挙に、神に憑かれた状態における直観(*epibole*)によって、理解の対象の全体を包括し、そして次に、ぎっしりつままったもの(*sunespeiramenon*)を展開し、諸ロゴスを通じて、一つの知性の働きを顕現させるし(*aneilissei*)、事象の本性に従って、一にならしめられてあるものを分割するが、あるときには、諸事象を一になす統一の働きを、またあるときは諸事象の分別の働きを、中間者として仲介するのであるが、それは、まさに、ロゴスは、統一と分別の二つの働きのそれぞれを、理解対象の包括と同時に包括する本性を持っていないし、また、そうすることが出来ないからである。こうした状態を、プラトンのこの発言(ロゴス)もまた、被っているものであり、まず神に憑かれて、知性の対象のアイデアについて全体の数を明らかにし、そして、その数において導き出されることがらを分割したのである。」

ここでは、神の靈魂そのものの働きとは言っていない。その働きを表わすロゴスが、世界創出の働きとして語られている。確かに、「ぎっしり詰まっている」ものとは、トラスユロスでは、ロゴスそのものであるのに対して、プロクロスでは、ロゴスが展開する対象であり、「顕現する」=「展開される」のは、トラスユロスでは、ロゴスであるのに対して、プロクロスでは、ロゴスが知性の働きを「顕現する」ことになっている。しかし、同じ『ティマイオス』の世界創出の働きに関して『プラトン神学』(5.65.23-5.66.7)では、プロクロスは「知性の働き(*noesis*)による諸ロゴスは、知性の対象がぎっしり詰まっているもの(*sunespeiramenon*)を顕現する=展開する(*aneilittousi*)」とロゴスの形相創出が明確に世界創出に関わる知性の働きに源があることを示している²⁴。

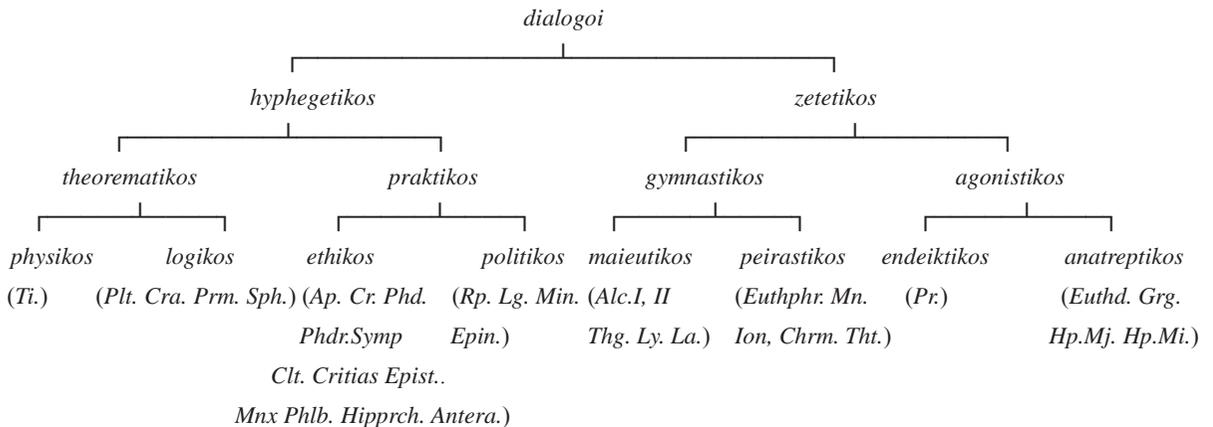
²⁴ 同じ用語、同じ考えは、『神学綱要』93.11-12。幾何学的知性の働きの場面では、『ユークリッド原論』註釈 4.12 (用語は産出用語 *proballein* とずれるが類は、95.12)。

従って、トラスユロスとプロクロスのロゴス論における符合は、単なる偶然、二つの言葉が近接領域に偶然二つのテキストに現われたことではない。また「中に詰まっている」ものが「表に現われる」という発想の点に限った類似に留まるものでもない。そうではなく、世界創出、感覚論における形相創出におけるロゴス論の問題として、明らかに、同一の問題圏のもとにあることがらである²⁵。因みに、現存古典資料中、問題となる両語を近接して用いているのは、プロクロスとボルピュリウス引用中のトラスユロスとを除いて他にない。

6. 結論

トラスユロスその人の個別具体的なプラトン解釈は現存していないけれども、また、DL、ボルピュリウスに伝わるトラスユロスの名のもとに語られる事柄も、トラスユロスその人以前の諸思想に負っている可能性は否定できないけれども、プロクロスは、その体系的帰一思想を導くためのプラトン著作解釈法、各個対話篇単一主題探求型解釈法を、形式的にも実質的にも、われわれの見地から見て、トラスユロスとの対論を通して、創出しているのであり、また、解釈の前提となる重要なロゴス論においても、プロクロスの論は、トラスユロスの論と、議論の枠組みにおいて通底するものである。

図 DL 3.49 (丸括弧内の作品名は、3.51-52 による)



²⁵ もちろんトラスユロスをこのロゴス論の創出者とは言えまい。プラトンのイデア論とストア派の作用因としてのイデアとを加え、神から生ずるロゴスを考えるキリスト教以前、トラスユロスとほぼ同時期のフィロン (Philo Judaeus (BC30-AD45)) (例えば、*de agricultura* 16-17)にも遡りうるし、更には、ストア派 Zenon の宇宙創成原理としての *logos spermatikos* に、もちろんプラトンの『ティマイオス』に、さらにはまた、ヘラクレイトス (DK B31) に、遡りうることがらであろう。そのほか、ストバイオスが引用するアルキュタス『ヌースと感覚について』(1.48.6)は、ピタゴラス思想のもとに、トラスユロス、プロクロスのロゴス理論を並べることが可能にする。新プラトン派内の先行するロゴス理論としては、プロティノスに、「(ロゴスが) nous にぎっしり詰まっている」(*Enn.* 5.9)という言葉のほかロゴス論は既に見られる (e.g. *Enn.* II 9.1)。イアンプリコスのロゴス理論は、また、明確な先行する思想として、ストバイオスの引用する『魂について』(1.48.8, esp. 1.48.8.6-9)ならびにシンプリキオスのアリストテレス『自然学』注釈中の言及 (*in Ph.* 9.786.11-22)のうちに迎れる。中期プラトニストとの関連は、Dillon, J. “Thrasylus and The Logos” (review of Tarrant’s *ThP*) *Apeiron* 29(1) (1996) 99-103.

The Origin of Proclus' *Skopos*-Finding Interpretive Way of Plato's Dialogues: A Historical Criticism and Inheritance of Thrasyllus' Interpretation

Akitsugu Taki

Abstract

With specific evidence on Proclus' interpretive way of Plato's dialogues I clarify what Harold Tarrant implied in his *Thrasyllan Platonism* (Cornell, 1993), especially in his textual criticism on Thrasyllus' *Logos* theory, quoted in Porphyrius' *In Ptolemaii Harmonica: the Neoplatonists'*, and most conspicuously in extant literature, Proclus', interpretive way of reducing every literary element of each dialogue to a single aim or *skopos* historically arises from their criticism and inheritance of what one at present can critically interpret as the interpretive way and its theoretical background both transmitted under the name of Thrasyllus.